



Ina Zweiniger-Bargielowska,
*Managing the Body: Beauty, Health, and Fitness in Britain,
 1880-1939*

(xii+394 頁, Oxford: Oxford University Press, 2010 年 11 月)

ISBN: 9780199280520

(評) 川崎明子

Akiko Kawasaki

『大いなる遺産』でピップが二度目に満足荘を訪問する場面を思い出していただきたい。ハヴィシャム嬢の「私を歩かせなさい」という命令に、ピップは言われるままに肩を貸し、部屋の中をぐるぐると歩き回る。ハヴィシャム嬢は「身体があまり強くなく」、まもなく「もう少しゆっくり!」とピップに言うが、速度は弱まるどころか勢いを増すばかりで、財産目当てにやってきた親戚たちの挨拶にもその歩みは止まらない。エステラとトランプ遊びをした後屋敷の外に出ると、「青白い顔の若紳士」がどこからともなく現れ、一戦を申し込んでくる。試合が始まってみれば、若紳士はそれなりに敏捷でも、腕力はピップにかなわずまもなく降参する。満足荘の敷地を出ようとしたところ、エステラが「何か嬉しいことでもあったかのように」顔を紅潮させながら待っていて、「したいならしてもいい」と言っキスをさせてくれる。

この場面を次のように解釈することは可能であろうか。ハヴィシャム嬢は親戚たちにあっさり遺産を渡すくらいならせいぜい長生きしようと、屋敷に引きこもりつつも身体を鍛えており、さらにその事実を親戚たちに見せつけている。青白い顔をしたハーバート・ポケットは、より健康になるべく普段から拳闘にいそしみ、適当な相手を見つけては実戦で腕を磨いている。エステラが頬を染めているのはピップの身体能力に興奮したせいで、高飛車な言葉でキスを許可するのも、強い男と判明したピップに本当は自分がキスをしたいからである。この一連の場面に存在するのは、自分の身体を鍛えたいという願望と、強い身体を持つ他者への賞賛なのだ。

Ina Zweiniger-Bargielowska の新しい著書を読んだ後ならば、このような解釈が一瞬頭によぎってもおかしくない。本書は、第一次ボーア戦争から第二次世界大戦開戦までの期間における、身体管理、健康促進、スポーツ文化を考察するものである。この期間の身体をめぐる理想は、ギリシャ・ローマ時代の「健全な精神は健全な肉体に宿る」であった。イギリスにおいて、国民の健全な精

神の重要性を認めない時代はなかつただろうし、健全な肉体の重要性を認めない時代もなかつただろうが、その二つが組み合わさり、一方が欠けてはもう一方も成立しないとして一緒に推進されたのがこの時代の特徴である。そして人間の美しさは、人工物に頼ることなしに、心身両方の健康から自然に生まれ出ると考えられ、結婚市場はもちろんのこと、労働市場においても強みとなった。写真が一般的になってからは、アスリートたちの鍛え上げられた肉体の写真が雑誌に掲載されて広く出回り、美しく健やかな身体のイメージが、具体性と説得力をもって追求されていく。ついには身体を管理することは、良き市民の義務とまで見なされるようになった。

身体管理を重視することの発端は戦争であった。戦争に勝ち、大英帝国を維持・拡大するには、強い兵士が数多く必要だ。しかし実際兵士を募って検査してみれば、身体が弱くて兵役に就けない男たちが数多くいることが判明した。愕然とした政府は国民の健康管理に本格的に乗り出す。そこにスポーツ文化を普及しようと企む運動選手たちや、もともと国民の健康管理に従事してきた医師や公衆衛生の関係者が加わって、上からも下からも国民の健康を向上させる運動が展開された。この後兵士の身体は、国民全体の健康の指標として注視され続けることになる。そもそも一体どうしてイギリスの男たちが弱くなってしまったかといえば、都市化により自然と縁遠い生活をするようになったこと、就業形態の変化によりオフィスでの座業が増えたこと、交通機関の整備により歩く時間が減ったことなどが挙げられる。

健康を増進するために、主に食事、運動、服装の三つが重視された。まず食事に関しては、中産階級のホワイトカラーの男性の肥満や、若い女性の拒食症による痩せすぎが問題になった。太った男は良い兵士になれないし痩せすぎの女は生殖に差し障りが出ると考えられ、ひいては国家と帝国の弱体化に繋がるとして危惧された。肥満の人が努力して劇的に痩せた様子を綴った本もよく売れた。ちなみにこの減量成功記の流行は、ヴィクトリア朝末期以降のセルフ・ヘルプ本とでもいうべきものが、当時の消費文化と結合した現象であるといえよう。健康でしかも安価であるとして、菜食主義の人气が高まり、ロンドンにはベジタリアンレストランが増えていく。野菜がもてはやされるようになった一因でもあるが、数ある栄養素の中でもビタミンが重要視されるようになる。またアルコールは健康を害するとして、節酒・禁酒が謳われた。

次に運動だが、デンマークやスウェーデンなど北欧諸国でメソッドが確立された体操やボディビルディングに加えて、ハイキング、水泳、キャンプ、自転車などが奨励された。戸外での運動が数多く推奨されたのは、日光浴が健康的であると認識されたからである。運動の伴わない日光浴も効果があるが、自

然の中で日光の恩恵を受けるべくなるべく肌を露出して身体を動かすことが一番であると考えられた。運動選手自らが本を書いたり弟子を育てたりして、習慣的に運動することの普及に携わったのも、新しい傾向である。運動に関してはまだ男女が区別され、水泳もキャンプも男女別に行われることが多かった。都市部には現在と似た形態のスポーツクラブができ、女性専用のクラスも用意され、人々は会員登録して週に数回就業後に運動をした。男子の体操などのトレーニングにおいては、もともと運動が良き兵士の育成を目的として推奨されたことを反映して、本物の軍隊の訓練が取り入れられることも多かった。さらに、スポーツクラブに足を運ばずとも自宅でトレーニングができる運動器具も販売された。

最後に服装だが、服装は二つの点で健康にとって重要であった。第一は、衛生的であるかどうかという点で、頻繁に洗濯できる素材や形状の服が提案された。もちろん服装以前に、入浴して身体を清潔に保つことも大切であった。第二は、身体への負担が軽いかどうかという点で、身体を締め付けない形態の服を着ること、軽い素材で作られた服を着たり着る枚数を減らして身につける衣服全体の重量を減らすこと、帽子を被らないこと、足下には歩きやすいサンダルを履くことなどが提案された。女性の服装の方がずっと早い時期に、緩く軽いものとなっていたので、男性の服装改革者たちはこの点で男性は女性に倣うべきだと主張した。とはいえ、女性の身体は拘束や重みから真に解放されたわけではない。ヴィクトリア朝の corsage が廃れたかわりに、女性の服のシルエット全体がだんだんと細くなっていき、細身の最新ファッションを着こなそうとダイエットに励んだ若い女性には、拒食症に陥る者もいた。日常着のみならず運動着も、身体に負担が軽いものに改革されていく。そもそも健康向上のために運動を行うのであるから、その際の服装も身体に優しいものであるべきであった。しかし水着だけは、セクシュアリティの露出と関わるために、機能性を優先したものになるには時間がかかった。

このような健康管理の文化には、面白い副産物もあった。一つは、健康の向上という目的のために、国家主義や人種差別主義を越えて異文化が積極的に受容されたことである。イギリスで運動の効用を説いた元運動選手には、北歐を主としたヨーロッパ大陸やオーストラリアの出身者が多かった。アフリカや太平洋諸国の土着の人々の簡素で滋養に富む食事や、伝統舞踊や伝統競技も、イギリスでも取り入れるべきものとして紹介された。ちなみに日本の柔道もその一つである。もう一つの副産物は、健康という同一の理想を掲げることにより、階級差が不問に付される傾向があったことである。例えば、肉食主義は健康的とされたのみならず実際のところ安価であったために、金持ちにも貧乏人にも

それぞれの魅力を持ちえた。また優れた運動選手として認められるためには、出身階級や人脈よりも、コンテストでの優勝といった実績や、セミヌード写真にうつった具体的な肉体が物を言った。

冒頭の『大いなる遺産』の場面に戻ろう。上で紹介した本書の内容を念頭にこの場面を再考すると、先ほどの解釈が成立しないことが分かる。体力をつけたいならば、ハヴィシャム嬢は日光を浴びながら庭で運動をするだろうし、そうして得た健全な肉体には、もう少し健全な精神が宿っているはずである。ハーバートはボクシングをすることで顔色が良くなり、力もついているはずである。ピップは自分の腕力を認識し、自分が強い男であると同時に健全な市民でもあることに自信を持ち、エステラにあれほどの劣等感を抱くこともないだろう。

本書はディケンズの没年の10年後からの時代を扱っているのですが、ディケンズ小説にはないものを論じている。しかしディケンズの小説にないものが見えることで、さもなければ気づかないようなディケンズ小説の特徴が浮き上がってくる。例えばディケンズ小説には「健全な精神は健全な肉体に宿る」という概念がない。『大いなる遺産』では、善人ハーバートも奇人ハヴィシャムも同様に身体が強くない一方で、罪人らしきモリーや暴力夫ベントリー・ドラムルは力持ちである。また、運動は健康に直結しない。『荒涼館』のダンス教師プリンス・ターヴィードロップは、過労で倒れる寸前である。『ハード・タイムズ』に登場するサーカスも、高い身体能力の表現というよりは自由な想像力の象徴として機能する。運動が健康に直結しないだけでなく、現代の基準では明らかに不健康な状態が病的に描かれることもない。『ピクウィック・クラブ』のジョーの肥満と過眠は、現代ではピクウィック症候群と呼ばれるものだが、小説の中では危惧の対象としてではなく笑うべきものとして描かれている。食物に関して、『クリスマス・キャロル』のクラチット家の貧しいながらも楽しい食事が表すように、栄養素やカロリーよりも、食卓を囲む家族の団結や、食卓を中心とする家庭という場そのものが尊重される。このように本書は、19世紀末から20世紀前半の身体文化にまつわる情報源として役立つのみならず、ディケンズをはじめ1880年以前に活躍した小説家の小説についても、陽画ではなく陰画という形で新鮮な視点を与えてくれる。

著者 Ina Zweiniger-Bargielowska は英国史の専門家で、現在イリノイ大学教授。 *Austerity in Britain: Rationing, Controls, and Consumption, 1939-1955* (2000) で British Council Prize を受賞。